

年上旦那さまに  
愛されまくっています

*Haruka & Yukibito*

---

栢野すばる

*Subaru Kayano*

eternity



エタニティ文庫

## 目次

年上旦那さまに愛されまくっています

5

書き下ろし番外編

お父さんとお母さんになって

327

年上旦那さまに愛されまくっています

## プロローグ

春花は、二十一歳になったばかりのOLだ。

職業はシステムエンジニアの卵。

都心の豪華なマンションに『旦那さん』と二人で暮らしている。

春花たちの住む家は、いわゆる超高級マンションの一戸で、窓の外には都心の大庭園の緑が広がり、ロケーション的にも最高の場所にある。

ネットでこっそり調べたところ、日本に長期滞在する外国人セレブや芸能人、政治家向けの物件らしい。

お風呂もベッドルームも二つずつ。広い広いリビングに、そのままつながった十畳ほどの台所まである。

本物の大理石が敷き詰められた玄関には、居住者のプライバシー保護のために、専用エレベーターまでついていた。

平凡な春花が、こんな豪邸に住んでいるのはわけがある。

いや……この結婚自体がわけあり、なのだ。

会社の同僚ですら、春花が既婚者であることは知らない。総務の人以外には内緒にしているのだ。

そんな事情を抱えている春花は、今朝も、いつものように朝食の準備にいそんでいた。――よし、味噌汁はできた。あとは鮭と、ほうれん草のごま和えを添えて。

春花は、ガスの火を消して『旦那さん』の分のお膳を整え、食卓に向かう。

――はあ、それにしても広い家。実家なんて台所を出たら二歩で食卓だったのに！ 内心ため息をついて、四十畳はあろうかというリビングダイニングを見渡す。それから、ソファで新聞を読んでいる『旦那さん』に明るく声を掛けた。

「おはよう、雪人さん！ 今朝は鮭を焼いたの」

春花の声に、ソファで新聞を読んでいた『旦那さん』の雪人が顔を上げる。

雪人は春花より十二歳年上の、いわゆる青年実業家だ。

経済界の名門、遊馬家の長男として生まれ、今は一族の経営する複数の企業の取締役を務めている。

本物の超エリート。本来なら、春花とは縁のない世界の人間だ。

「いい匂いがすると思った。朝から頑張ったんだな」

雪人が低い声でそう言ってくれたので、春花は嬉しくなって微笑んだ。

朝の七時前だというのに、雪人はもう着替えを済ませている。いつもそうなのだ。彼は春花の前で緩んだところなど一度も見せたことがない。

——隙がなくて、お侍さんみたい。

見慣れたはずの雪人の姿に、春花はほんの少しみとれてしまった。

それから、くるくるとはねている自分の寝癖に気づいて、慌てて指先で撫でつける。

——私もちゃんとしないと……

春花は改めて、隙のない雪人の姿を見つめた。

きつちりと整えた黒い髪に、引き締まった大柄な体躯。誰もがみとれてしまうような男前だが、厳しい雰囲気有近寄りがたさを醸し出してもいる。

雪人は、名前の通り、凍てついた雪のような男だった。

彼のクールな態度は、誰に対しても変わらない。

普段から感情を表に出さないし、笑みも滅多に浮かべない。言動にも常に抑制がきいていて、まるで氷の彫像のようだ。

「ありがとう」

雪人はいつもと変わらない静かな口調で言い、ソファを立って食卓に移動してきた。

「皆そうだな」

春花が整えたお膳を一瞥し、雪人が低い声で呟く。

どうやら今日の朝食はお気に召してくれたようだ。

「よかった！」

『旦那さん』の言葉に安心し、春花は自分の分のお膳を取りに台所へ戻る。

失敗して焦がした鮭が、春花の分だ。

お膳を手に食卓につき、春花は朗らかな声で言った。

「いただきます」

春花のお膳目をやった雪人が、無言で自分の鮭を取り分けて、春花のお皿にのせた。

「そんなに焦げてたら、君の食べられるところが少ないだろう」

「え、あ、あの、大丈夫。私、焦げてるところが好きだから」

慌ててそう答えた春花の前で、雪人が小さく笑った。

「まだ若いんだからたくさん食え。俺はいい。三十過ぎたらそんなに山ほどいらぬ」

有無を言わず、雪人が鮭の切り身を押しつけてきた。

それから彼は、品のいい仕草で味噌汁を口に運ぶ。

「……料理もずいぶん上手くなったな。君と暮らし始めた当初は、どうなることかと思っただが」

雪人の言葉に、春花は真っ赤になって答えた。

「そ、それは！ あの、トマトにお砂糖掛けただけのおかずとか出して、ごめん……な

「さい……」

その言葉に、雪人が噴き出す。それから、春花に視線を向けた。

「そうだ、春花」

切れ長の形のいい目に見つめられ、春花の胸がドキリと高鳴る。

「そろそろ、離婚しようか」

穏やかな雪人の言葉に、春花の顔から微笑みが消えた。

「りこ……ん……」

「ああ、結婚するときに約束しただろう？」

淡々とした雪人の言葉に、春花は人形のようにこくと頷く。

「うん……約束……した……」

身体中の血が、すうっと引いていくような気がする。自分の心臓の音が、やけにはつきり聞こえた。

ずっと、いつかは言われる言葉だと心していたつもりだったけれど……急すぎる。春花は無言で、手にした箸はしを握りしめた。

「先生が亡くなられて、もう一年経つ。君も働いて貯金ができたはずだから、大丈夫だろう。離婚の責任は俺にあることにして、慰謝料いしやうりょうも支払う。とりあえず一千万くらいあれば、当座の生活は問題ないはずだ」

凍りつく春花に、雪人は言った。

「……いつまでも俺といた方がいい。今までありがとう。君は君の新しい人生を見つけてなさい」

そう言い終えた彼の顔は、いつもと同じ、鉄壁の無表情だった。

## 第一章

……離婚しよう。

雪人のその言葉が頭から離れないまま、一日があつという間に過ぎた。

システム開発の会社に勤める春花は、入社一年目とはいえ、かなり多忙だ。

専門学校で情報工学を学び、基礎的な知識をすでに持って入社したお陰で、春花は先輩から仕事を山ほど割り当てられている。

一応、最若手なりに、戦力として期待されているのだ。

しかし今日は、頭が全く働かなかった。

三時間も残業したはずなのだが、何をしたのかよく思い出せない。

春花は通勤用のリュックサックを背負ったまま、ふらふらと帰途についた。

——わかった。わかってる、うん、大丈夫。離婚するっていうのは、結婚したときからの約束だもん……貯金もできた。独立できる……大丈夫。足が砂に埋もれたように重い。家に帰りたくない。正確に言えば、雪人と顔を合わせるのが辛いのだ。

雪人の顔を見たら、もう少し側にいたいと泣いてしまいそうだ。だけどそんな懇願すらも、彼はきつとこんなふう流すだろう。

『そもそも、結婚は一年間の約束だった』と。

——でも私は一緒にいたい……。お子様で迷惑な存在かもだけど、一緒にいたい。迷惑掛けないように仕事だって家事だって頑張ってるのに、やっぱりだめなのかな。雪人さんは私のこと、嫌いなのかな……

何度も涙ぐみかけたが、泣くのが苦手な春花は泣けなかった。

こんな気持ちでは家に帰れず、何となくカフェに寄って甘い物を摘んでみた。けれど、もう日付が変わる時刻だ。

さすがに明日の仕事のことを思うと、これ以上夜更かしはできない。

——帰りたくない……

春花は明るい色のまつすぐな髪に指を絡め、無意味にくりくりといじり回す。

ピカピカのガラス窓に映るのは、二十一歳にしては、ややあどけない顔をした自分の

姿だ。

——結局、成人しても童顔のまんまだ……。うう、お母さんは美人だったのに、どうして私はお子様なのかな……

春花はため息をついて、自分の顔から目をそらす。三十になる前に交通事故で亡くなった母は、とても大人っぽく、美しい人だった。一応春花も似ていると言われるけれど、鏡を見てもため息しか出ない。

雪人の隣に立つと、自分が妹か親戚の子にしか見えないこと、彼から相手にされていないことのどちらも、痛いくらいに感じる。

これまで何度も言い聞かせてきたことだ。

『奇跡でも起きない限り、雪人から愛されるはずがない、期待してはいけない』と。だが、やはり、離婚を切り出されたのは辛かった。

——春花が雪人と出会ったのは三年前。

——まだ、春花の父が存命の頃だった。

父は医者で、祖父の代から、東京のベッドタウンで『渡辺医院』という小さな診療所をやっていた。父は祖父の跡を継いだが、春花に『医者になってここを継げ』とは言わなかった。

記憶の中の父が全く贅沢をしていなかったことを思うと、おそらく、あまり条件のい

い仕事ではなかったのだろう。

その病院に立ち退き交渉にやってきたのが、雪人だった。

春花と父が暮らしていた町には昔ながらのカフェや公園が多くあり、それが近年脚光を浴びるようになってきていた。『人気の駅ベストテン』に選ばれたりもして、ここ数年でマンションもたくさん建ち、駅ビルも改装されるようになっていた。

その開発プロジェクトをメインで請け負っていた会社が、雪人が役員を務める『遊馬土地開発』だった。

三年前のあの日、雪人に診療所の移動を打診された父は、こう言った。

『あと一年ほどで診療所は畳もうと思っているのです。それまで、待ってもらえませんか』  
当時のことを思い出すだけで胸が苦しくなる。

父は、春花が中学生の頃から病に冒されていた。そして専門の病院に通い、闘病を続けながら、診療所に通ってくる患者さんたちを診察していたのだ。

病気が日に日に悪化し、痩せ細っていく父と暮らすのは、悲しかった。

周囲の人は『お父さんには、悔いの残らないように過ごさせてあげて』と助言してくれたが、春花は嫌だった。死んでほしくなかった。たった一人の家族なのに……

父は穏やかで優しい人だった。

母がいない春花に寂しい思いをさせたくないと言い、いつも一緒に朝食をとってくれ

た。『春花には反抗期がなかった』と笑われたくらい、春花は父のことが大好きで、あの暮らしがずっと続くのだと信じ切っていたのに……

『病気は必ず治す。春花を一人にしない。春花のことはママと約束したんだから』

……ずっと言ってくれていたそんな決まり文句を口にしてくれなくなったのも、ちょうど、雪人が診療所を訪ねてきた頃だ。

それはつまり、父が、余命を宣告されたあたり……

『先生は、なぜあと一年でこの診療所を畳まれるのですか？ こちらはかなり評判もいいようです。駅ビルの最上階に医療施設のフロアを設ける予定ですので、そこに有利な条件で移動されてはどうでしょうか。こちらとしても、移転に関して色々無理なお願いをするので……』

戸惑った様子の雪人に、父は朗らかに答えた。

『私は身体を壊しているのです、もう診療所は続けられないのです。いついなくなるかわからない医者なんて、患者さんに迷惑を掛けますからね』

もってあと二年、と言われた父は、患者さんを一年掛けて他の病院に引き継ぎ、病院を畳んで療養に移るつもりだったらしい。

『診療所を畳んだあと、こちらの土地をお譲りすることに異論はありません。跡地はマンションになるんですか？ いいいですね、このあたりに人が増えるのは。私と娘が育つ



た町ですから愛着がありましてね、ずっと住み継がれる場所になるといいですね』  
父の声が、春花の脳裏に鮮やかによみがえる。

——お父さん……

思い出に沈み込みそうになった春花は、スマートフォンが震えていることに気づいて  
我に返った。メールが何通か来ている。送り主は雪人だ。

帰りが遅いがかしたのか、迎えに行った方がいいのかと書かれている。

冷たいけれど過保護な雪人のことだ。春花が真夜中まで連絡なしで戻らないので、心配しているに違いない。

……そう、まるで父親のように。

不思議なことに、父と雪人は『立ち退き交渉をしに来たビジネスマンと地権者』という間柄とは思えないくらいに意気投合していた……ように見えた。

特に重要な用事がなくても、雪人はふらりと父の診療所や、ときには家にまでやってきた。そして、二人で何かを話し込んでいた。

——何を話していたんだろう、お父さんと雪人さん……

春花は、父と雪人の間に交わされていた会話がどんなものなのか、よく知らない。

しかし、どうやら雪人は、二十歳近く年上の春花の父に、何らかの友情を感じていたらしい。

だから、友人の娘である春花のことを、非常に手厚く保護した、ということのようだ。

——わかつてる、雪人さんは私のことを、友達から預かった子どもだと思ってるだけ。脳裏に、これまでの雪人との思い出がよみがえる。

春花はため息をつきつつスマートフォンを操作し、保存しておいた画像を開いた。  
桃色の振り袖を着て微笑む春花と、スーツ姿で無表情の雪人が並んでいる写真。

成人式には、雪人が買ってくれた振り袖を着て出席した。そのあと、彼が迎えに来てくれて、写真を撮ってもらったのだ。画像のデータも、そのときに提供してもらった。

『俺はいい』と拒む雪人に懇願して、一緒に撮影してもらった大事な一枚。  
雪人と二人で写った写真はこれしかないの、春花の宝物なのだ。

しばらくそれを眺めたあと、春花はメールを立ち上げた。

『仕事で遅くなりました、ごめんなさい。もうすぐおうちです』

その一文を打ち込み、春花はカフェを飛び出した。

——私は雪人さんが好きだからずっと一緒にいたい。でも私は……ただの保護対象だし、迷惑を掛けているだけ。助けてもらっているのに、これ以上わがままは言えない……  
わかりきった事実が春花の胸をえぐる。

冬が訪れた都心の町を走り抜け、春花はマンションのエントランスに駆け込んだ。エレベーターに飛び乗ったとき、スマートフォンが鳴った。

慌てて電話に出ると、雪人の不機嫌な声が飛び込んでくる。  
『今どこにいるんだ。迎えに行くから、うろろろしないで待っていなさい』  
どうやらかなり不機嫌なようだ。

朝切り出された離婚の話に、ともに返事をしなかったからだろうか。

「大丈夫！ 今もう、エレベーターの中だから」

そう言って電話を切ると同時に、エレベーターが最上階についた。春花は眼前の玄関扉を開ける。

「ただいまあ」

ちゃんと今日も、明るい声が出せた。

——ああ、私また笑ってる……

父の闘病が始まった頃から、春花はどんなときでも明るい声が出せるようになった。それ以来、どんなに悲しくても自分の心を見せずにニコニコすることが得意になっている。

今日も明日も、家を出て行く日も、きっと笑顔でいられるだろう。心はズタズタになっていたとしても……

「遅い。連絡も超越さず何してたんだ。新人なのに、こんな時間まで仕事があるのか」  
不機嫌な顔をした雪人が、腕組みをして壁にもたれかかっている。威圧感のあるその

表情に一瞬すくみつつも、春花は笑顔で彼に謝罪した。

「ごめんなさい。最近忙しくって。ちゃんと連絡すればよかった」

「君に何かあったら先生に申し訳が立たない。俺としては、責任を持って預かっているつもりなのに……そんなことじゃ、いつまでたっても独り立ちさせられないだろう？」  
不良娘を叱るような口調に、春花はうつむいてしまった。

「はい、気をつけます……」

何も答えず、雪人が部屋の中に引っ込んでゆく。春花は無言で彼の広い背中を見送った。雪人の冷やかな表情が胸に突き刺さり、痛くてたまらない。

——もう、潮時なんだなあ……私はこの家を出て行かなきゃいけないんだ。今までみたいに、二人で過ごせなくなる……

春花は自分の部屋に飛び込み、クッション代わりの縫いぐるみを抱きしめた。

一緒に暮らし始めた当時、なぜか雪人が買ってきてくれた、おまんじゅうのような熊の縫いぐるみ。子ども扱いされたことはちょっとせつなかつたけれど、春花にとっては愛しい宝物だ。

ふわふわした縫いぐるみを抱いたまま、春花は唇をかみしめた。

雪人が好きだ。

父を訪ねてくる彼を、葬儀に駆けつけてくれた彼を、ひとりぼっちになって泣いてい

るとき、黙って側にいてくれた彼を……好きになった。

その気持ちは、一緒に暮らしたこの一年で強くなる一方だ。

——相手にされていないなら、出て行かなきゃいけないなら、最後に……自爆しちゃおうかな！ そうだよね、黙って出て行くより、自爆の方がいいに決まってる。

柔らかな縫いぐるみに顔を埋め、春花は身じろぎもせず考えた。

どうせ叶わぬ恋ならば、最後にきっぱり碎け散って諦めるのもアリだ。

そう考え始めたなら、それが正解のような気がしてきた。

雪人に言おう。大好きだから一緒にいたい。迷惑は掛けないし仕事も頑張るから、一緒に暮らしてほしいと。

……それでだめなら、この恋心に蓋をしよう。いつか消えてなくなる日まで、この恋のことは忘れよう。

指を縫いぐるみに食い込ませ、春花は勇気を奮い立たせた。

振られる心構えをするのは、途方もなく怖い。だが、そうでもしなければ雪人への想いは諦められそうもなかった。

雪人の引き締まった口元が、愁いを帯びた横顔が、春花の脳裏に浮かび上がる。

いつも彼を見ていたからだろうか。目をつぶれば、まるで彼が側にいるかのように、その姿を思い描くことができる。滑らかな肌、黒く艶のある髪、筋肉の浮いたしなやか

な腕。

出会ったその日から、父の葬儀に駆けつけてくれた日のこと、そして一年間一緒に暮らしてきたこと……。春花は雪人のことなら、どんな細かいことでも覚えている。

父の葬儀の日。

春花は、圧倒的な悲しみに疲れ果てていた。愛する父がもういなくて、一人きりになってしまったのだという絶望に押し潰されて、涙も出ないまま弔問客に頭を下げていた。

『春花ちゃんは泣かないんだねえ』

押搦するようにそう言ってきた遠い親戚の言葉を、ぼんやりと思いつく。

彼らは、父の壮絶な闘病死に泣き叫ぶ可哀相な少女の姿を、心のどこかで期待していたに違いない。

それなのに春花は父の死を嘆きもせず、人形のようにペコペコ頭を下げているため、不満に思ったのだろう。

少なくとも春花の耳には、彼らの言葉はそのように聞こえた。

春花に寄り添ってくれたのは、祖父の代からの患者さんたちと、父の友人たちだった。彼らは親戚でも何でもないのに、やみくもに動き回ろうとする春花を休ませてくれ、代わりに色々な作業を引き受けてくれた。

雪人もそうだ。彼は、父の訃報を知って駆けつけ、ずっと春花を励まし、そして余計

なことを言いに来る親戚をそれとなく遠ざけてくれたのだ。

『俺では先生の代わりになんてなれないだろうが……春花さんが安心できる日まで、俺が側にいる』

甲問客が大体捌けた夜、そう言っただけで肩を抱いてくれた雪人の顔を、はっきりと覚えている。

だが、雪人には、春花への恋愛感情などない。

彼が春花と結婚してくれた理由は、天涯孤獨になった『友人の娘』である春花を保護するため。

そして、雪人が『強いられた政略結婚』から逃れるためなのだ。

『性格の合わない婚約者と婚約破棄したい。だから、一年だけでいい。協力してほしい』父を亡くしてから一月ほどたったころ。春花は雪人にそう頼まれ、受け入れた。

雪人が困っているならば助けたいと思ったからだ。

——私と偽装結婚して、婚約破棄しようとしたくらいなもの。どのくらい嫌だったのかな、婚約者さんとの結婚が。

婚約者のことを雪人に聞いても、もちろん詳しくは教えてくれない。ただ『俺と彼女は合わなかった、いい関係を築けなかった』と言っていただけだ。

とにかく、この偽装結婚のお陰で、春花は住む家と安心を、雪人は婚約者と結婚しな

くていい理由を手に入れた。

そしてきのう、雪人は『当初の約束通り、一年目の結婚記念日で終わりにしよう』と言い出したのだ。

でも、春花は雪人と別れたくない。

図々しいのはわかっているけれど、春花は、自分を助けてくれた雪人のことが好きだ。春花は、顔をセーターの袖で擦った。

やはり涙はこぼれない。泣けない人間になったのだな、とぼんやり考える。

ふと気づくと、傍らに投げ出したスマートフォンがメッセージの着信を知らせている。『渡辺さん、土曜の飲み会来る？ その後石田先輩の家でオールでゲーム大会やるんだけど』

先輩の青山優あおやまゆうからのメッセージだった。彼は確か二十七歳。優秀なエンジニアで人当たりもよく、イケメンで皆から慕われている兄貴肌の青年だ。

専門卒で入社してきた春花のことも気に掛けていて、こうやってこまめに社内のイベントに呼んでくれる。

——オールナイトでゲーム大会か、楽しそうだな。

石田先輩は奥さんもかつて同じ会社に勤めていて、夫婦で若手社員を呼んで色々なイベントをしてくれる人だ。ゲーム大会に行ってみたい気持ちはあったが、すぐに諦めた。

雪人が『女の子が外泊なんでもってのほかだ』と怒るに決まっているからだ。お父さんより厳しいな、と思いつつ、春花は丁重に断りのメッセージを送る。

『渡辺です。家族が厳しいので泊まりには行けないんです。飲み会は参加できそうだったら、また連絡します！』

そう返事をして、ため息をつく。

渡辺というのは、春花の旧姓だ。

『遊馬春花』と呼ばれたことはない。

——私が離婚しても、会社の人は何も気づかないんだよな。旧姓で働いてるし、総務の人には結婚してることを黙ってもらってるし……。私が『遊馬春花』だった事實は、ほとんど誰にも知られないまま、消えちゃうんだ。

むなしさと寂しさが胸をかきむしる。

——私、雪人さんがどうしても好き……

改めて自覚すると、その恋は消せない炎として燃え上がる。

偽装結婚した日から、毎日言い聞かせてきた。

『いつか別れるんだから、彼に恋するのをやめなきゃ』と。

けれどこの一年、恋心をなくすことはできなかった。何をどうやっても、春花の恋心を消す消しゴムは見つからなかったのだ……

離婚を切り出されてから数日、その話題には触れない日々が続いた。

気まずい空気を払拭<sup>ふっしょく</sup>するために明るく振る舞いたいのだが、話をすれば、いつ正式に離婚するかの話になるかもしれない。それを避けたくて、自然と口が重くなってしまふ。雪人も妙にほんやりしていて、春花の話に生返事をするだけだ。

——雪人さんってば、最近は毎晩お酒飲んで帰ってくるし……どうしたんだろう。今までは減多にそんなことなかったのに。

春花と雪人は実質的には夫婦ではないので、この一年間、ただの同居人として暮らしてきた。

二人で淡々と朝食をとり、予定が合えば夕食も一緒に食べる。

春花がこの家に住まわせてもらう代わりに、家事をできるだけ担う。それだけの関係だ。お風呂も寝室も二つずつあるこの家では、二人の共用部分は広いリビングルームだけ。

春花は雪人の寝室に入ったことはないし、彼が春花の部屋に来たこともない。暗黙のルールで、お互いの領分を侵さないように暮らしてきたのだ。

——だから、私がしようとしていることは、ルール違反……

雪人より早く帰ってきた夜、春花は身支度を整え、勇気を振り絞ってそっと雪人の寝室の扉を開けた。

——勝手に入ったら、きつと嫌がるよね……  
不機嫌な雪人の顔を想像した瞬間、足がすくんでしまった。  
だがすぐに『自分にはもう、あとがないのだ』と思い直す。  
どうせ振られるのであれば、死に物狂いになってから振られたい。  
もう二度とこの恋が叶う日は来ないのだと納得して、彼のもとを去りたいのだ。  
だから、今夜彼に告白してみる。

『雪人さんの本当の奥さんにしてください』と。

おそらく雪人は、春花のこの申し出をきっぱりと拒むだろう。

何しろ彼にとっては春花は子ども。それも、友人の娘でしかないのだ。

それならば、雪人の口から『君のことは絶対に抱かない、女性として見られない』と  
はっきり言われたい。このじくじくと膿んでいる恋心に引導を渡してほしい。

——そこまできっぱり振られたら、私、きつと雪人さんを諦められる。うん、多分きつ  
と……諦められる……よね？

そう思い、春花は唇をかんだ。

訪れた雪人の部屋は、ひどく殺風景だった。

ベッドに机と椅子、それから難しい本が詰め込まれた本棚があるだけ。椅子の背には、  
ルームウェアのカーディガンが投げ出されている。

ふと、春花の鼻先を、爽やかな匂いがくすぐった。春花の大好きな、雪人の匂いだ。

——そういえば、雪人さんっていい匂いがするんだよなあ。カーディガンに香水とか  
つけてるのかな？

思わず手を伸ばしカーディガンを抱きしめたとき、遠くで玄関扉の開く音がした。

春花はカーディガンを抱いたまま、部屋の中を右往左往する。

——か、帰ってきちゃった！ どうしよう！

急激に後悔が押し寄せる。

思い詰めた末の行動とはいえ、やっぱり、部屋に勝手に入るなんてよくなかった。慌  
ててそこから出ようとしたが、すでに足音は近づいている。

手遅れだ。

——うう……怒られる……！

春花がカーディガンを抱きしめたまま身をすくめた瞬間、部屋の扉が開いた。

「……びっくりした。何してるんだ」

コートとバッグを手に、雪人が目を丸くしている。かすかに漂ってくる煙草とお酒の  
匂い。今日もまたどこかのバーに寄ってきたのだろうか。

彼の目線は、春花が抱きしめているカーディガンに注がれていた。

「ご、ごめんなさい！」

雪人の姿を見た瞬間、先ほどまでの気力は吹っ飛んでしまった。

春花は半泣きになりながら、慌てて言いつづけた。

「わ、私、お嫁さんにしてもらおうと思って……あの……」

パニック状態で口にした直後、さっと我に返って頭に血が昇った。耳も顔も熱くてたまらない。

——な、なにを馬鹿なことを言ってるの……。唐突すぎるでしょう？

「もう嫁だと思うが」

予想通りのクールな返事が返ってきた。

雪人は肩をすくめ、バッグを椅子の上に置く。それからコートと背広をハンガーに掛け、クローゼットに押し込んだ。

「それ、着るから貸しなさい」

春花は我に返り、抱きしめていたカーディガンを震える手で差し出す。

「……俺の部屋で何をしてたんだ」

呆れたような口調だった。答えられず、春花は唇をかみしめる。

「ゆ、雪人さんが帰ってくるのを待ってた」

勇気を振り絞ってそう答えたが、雪人の反応はなかった。

「私は、あの、私は、雪人さんが好きだから、ちゃんと本物の奥さんにしてほしかつ……」

話が上手くまとまらず、だんだん惨めになってくる。

雪人からは、相も変わらず冷静な気配しか伝わってこない。

「どういう意味だ」

「あ、あの……き、キスとか……してほしかつ……」

抱いてくれ、なんていう勇気はやっぱり出てこなかった。

恐ろしくて脚が震える。そんな春花に、雪人が追い打ちを掛けるように言った。

「……馬鹿馬鹿しい」

雪人が背を向けて部屋を出て行くこうとする。

春花ははじかれたように、雪人の背中に飛びついた。

「待って！」

足を止めた雪人に、春花は必死に言いつづける。

「私、本当に雪人さんが好きなの。好きだからまだ一緒にいたいいの！」

「俺は、君の保護者だ。君は依存を恋だと錯覚しているだけだ、冷静になりなさい」

雪人の他人行儀な言葉に、かあつと頭に血が昇った。

「違う！」

自分でも驚くくらいの声で、春花は雪人の言葉を遮った。

「子ども扱いされるの、もう嫌なの！」

雪人が驚いたように振り返る。長い髪をぐしゃぐしゃに振り乱して、春花は言った。「私、成人式に出たんだよ。着物買ってくれたんだから覚えてるでしょ？ 今ももう、お金だつて頑張つて稼げてるし。これからもちゃんと働いていく。だから、子ども扱いたくないで！」

その言葉に、雪人が眉根を寄せた。

彼の表情は、怒っているというよりは、痛みをこらえているように見える。

「……そんなことを平気で言うから、君は子どもなんだ」

春花は雪人をにらみつけて、精一杯迫力のある声で言い返す。

「子どもじゃない。私、ちゃんと雪人さんの奥さんにしてほしいの。だって好きだから。それがだめなら、今すぐ出ていく。好きな人に振られたら、一緒にいるのは辛い。だからそのときは、ちゃんといなくなるから」

雪人が、かすかに口元をゆがめた。

「たとえ相手が俺であつても……男に、気軽に好きだとか言わない方がいい。君は、男のことなんか何もわかっていないんだ」

やはり雪人は揺らがらない。

春花のことは、選んでくれない……

そう実感した瞬間、春花はカッとなって言い返していた。

「そんなことない。私だつてちゃんと知ってる。……だつて男の先輩が会社にはいっぱいいるし」

言つてから、虚勢を張りすぎたと後悔する。

正直に言えば、春花は男性とまともに交際した経験などない。手もつないだことがないくらいだ。

緩やかに弱っていく父との暮らしに精一杯で、男の子にかまける時間など、春花にはなかったから……

「……何を知ってるんだ？」

そう言つた雪人の様子がいつもと違うことに、うつむいていた春花は気がつかなかった。だから、そのままの勢いで続けてしまう。

「私、雪人さんが思つてるほど子どもじゃない。けっこう色々知ってるんだから！ 会社の先輩とかと遊んだときに覚えたし」

春花は顔を上げ、酒の席で先輩たちが交わす他愛のない下ネタを思い浮かべながら答えた。

先輩たちはいわゆる理系男子が多く、大体が穏やかで優しい。だから下ネタも女子社員に配慮してあまり言わないのだが、それでもたまには耳にすることもあつた。そういうことをちらつと聞いているから、春花とて完全に無知というわけではないのだ。



「そうか」

雪人が薄笑いを浮かべ、春花の身体を壁に押しつけた。

——え？

突然の乱暴な仕草に、春花は驚いて目を見張る。

近くに雪人の顔が迫っていた。

「それは聞き捨てならないな、何を覚えたんだ、春花」

何が起こったのかわからず目を丸くする春花に、雪人が言う。

彼の視線はいつもと同じで冷たいままだが、絡みつくように春花を見据えている。

「だ、だから、男の人のこと……を……」

雪人の視線に動揺し、春花は小さな声で答えた。

酔っ払った真つ赤な顔で『三十過ぎると毎晩はエッチできない！』と言って周囲の爆笑を誘っていた新婚の先輩や、『徹夜続きで疲れすぎると、逆に朝勃ちがすごくて焦る』と言っていた同僚の男性。彼らの話を思い出し、急激に恥ずかしくなってしまう。

——ちよっ……！　こんなのを雪人さんに言うの……？　無理！

春花は頬を染めて、ふいと顔をそらした。

「べ、べつに、一般常識的なことだけど」

「ふうん、それは……腹立たしいな」

雪人が、ほとんど聞こえないくらいの声で呟いた。

——ん？　雪人さん、今なんて言ったんだろう？

雪人に視線を戻すと、彼が切れ長の目をすつと細めた。

「じゃあ、どれだけ子どもじゃなくなつたのか、保護者の俺に報告してもらおうか。君の言う『男と遊んで覚えた一般常識』とやらを俺にも教えてくれ」

雪人の手が、春花の顎をくいと上向かせる。

何を、と尋ねる間もなく、春花の唇が雪人の唇で塞がれた。

——え……っ？

キスされている、と理解したのは、数秒経ってからのことだった。

目を丸くしたままの春花の腰が、雪人の腕でぐいと引き寄せられる。

たくましい胸に抱きすくめられ、春花は硬直した。こんなふうには抱きしめられて、キスされたのなんて、生まれて初めてだ。どうしていいのかわからず、春花は慌てて雪人の胸を押しつけようとする。

だが、春花の力では、彼の身体は揺らぎもしなかった。

キスをされたまま、春花はぎゅっと目をつぶる。うつつすらとお酒の味のする舌が、春花の唇を割って入ってきた。

「……っ？」

驚きのあまり、思わず声を漏らしてしまう。  
 雪人が顔を傾けると同時に、春花の舌先が雪人のそれでツツと舐められた。  
 繰り返し舌先をつつかれて、春花の身体が抑えようもなく火照り始める。  
 肩で息をしながら、春花は必死で雪人の様子をうかがおうとした。

雪人の顔が、ゆっくり離れる。  
 彼は笑っていないかった。

何の感情も浮かんでいない目で、春花をじっと見つめている。

「なんでそんなに驚いた顔をするんだ。会社の先輩とやらに習ったんじゃないのか。さすがに、このくらいのことばもう知っているんだろう？俺にキスをしろと言ったのは君なのに、なぜそんなにびっくりした顔をする？」

なぜ彼は、急にこんな真似をするのだろう……。動転して、思わず反論してしまう。

「ち、違……こんなの、習ってな……っ！」

今のは、ファーストキスだ。二十一にもなつて奥手すぎる……。と笑われるかもしれないが、子どもの頃に父がほっぺにキスしてくれた以外、こんな経験はない。

自分に対して無関心だった『保護者』に突然キスされた衝撃で、頭の中が真っ白だ。  
 嬉しい嬉しくない以前に、驚きすぎて言葉も出ない。

ふと気づけば、膝がかたかたと震えていた。

そのくらい、雪人のキスは激しくて怖かったのだ。

「では、何を習ったんだ。俺に教えてくれ。君はもうなんでも知っているんだろう？」

低い声で言った雪人が、再び春花の唇を奪う。

壁に押しつけられているので、これ以上後ろに下がれない。カタカタと膝頭を震わせながら、春花はただそのキスを受け止めた。

確かに、キスをしてくれと言ったのは自分だ。

けれど、想像していたよりも雪人のキスが激しくて、怖い……。というか、重い……。と  
 いうか、上手く言葉にならない。

心臓がドキドキし過ぎて、息が苦しくなってきた。

ゆっくりと唇を離れた雪人が、春花の顔を両手で包んだまま尋ねる。

「俺に言ってみなさい、何を教えてもらったのか。……答えによっては許せないかもな」  
 低い声で問われ、春花は子犬のようにぶるぶる震えながら口を開いた。

「せ、先輩は、新婚さんだけど、三十過ぎたら毎日エッチできないって……。あ、あと、  
 別の先輩は……。徹夜続きだと、あ、朝、元気になって不思議だって……。あ、あと、  
 言っているうちに羞恥で頭が爆発しそうになる。」

きつと今、春花の顔はゆでだこよりも真っ赤に違いない。

無表情だった雪人が、徐々に怪訝な顔になる。

——こ、こんなの言わされるの、恥はずずかし……っ。

見る見る泣きそうな顔になる春花がおかしかったのか、雪人は薄い笑みを浮かべた。

「……本当にそんなことを習ったのか？」

顔の近さにドギマギしつつ、春花は視線をそらして小さな声で答える。

「そ、そう……。飲み会で皆が話していて」

「ふうん、そうか。全く君には驚かされる。あまり焦あせらせないでくれ」

雪人はそう言って、目を伏せて小さく息を吐く。

「だ、だから、だから……。子ども扱いはやめて……」

春花が蚊の鳴くような声で念押しした刹那、雪人が春花の腕を引いて大股に歩き出した。

「きゃっ！」

驚く春花の身体を軽々と抱えて、ベッドの上に投げ出す。

「そう、じゃあお望み通り、子ども扱いは今からやめようか」

ベッドに転がされたまま呆然としている春花に、雪人が静かな、しかしはっきりとした口調で告げた。

そして春花を見下ろしたまま、雪人が長い指でネクタイを解き始める。

「まずは、自分が何を知らないのかくらい、知っておいてくれ」

ネクタイを放り出した雪人が、スプリングをきしませてベッドに乗り、春花の身体にゆっくりと覆い被さってきた。

「他の男に妙なことをされたのかと思って、腹が立って仕方がなかった。何でこんなに腹が立つんだろうな……。本当に、最近、自分が制御できなくて困る」

「な、何、どうしたの……」

春花は、間近に迫った雪人に尋ねた。心臓がドキドキし過ぎて、苦しいくらいだ。

雪人の感じがいつもと違う。いつもはもっと距離があって冷たくて……。春花をこんな焼けつくような目で見たりはしない。

なのに今の雪人からは、ひりひりした苛立ちのようなものを感じる。

本能的に、彼の側から逃げたくなってきた。

今から食べられる小動物ってこんな気持ちなのだろうか。春花は反射的に、そんなことを考えた。

「雪人さ……。ん、く……。っ」

ベッドに組み伏せられ口づけをされた瞬間、春花の身体の内芯こゝろにじんとした疼うずきが走った。

思わず両脚を閉じ合わせた春花の口に、雪人の舌が割り込んでくる。

「っ……。う……。っ」

身体中がむずむずして、恥ずかしくて、身体をよじった。ベッドがきしみ、雪人の膝が春花のぎゅっと閉じた両膝を強引に開かせる。

反射的に、転がっていた枕を握りしめた。

唇に雪人の熱い吐息を感じ、春花の身体が火照り始める。

身体の奥のむずむずした感じが強くなってきた、春花はたまらず小さく声を漏らした。

「ん……………」

自分の喉から出た妙に甘ったるい声にぎよっとする。

恥ずかしくてどうしようもなくなり、目から涙がにじんできた。

雪人がゆっくりと唇を離し、春花の顔をのぞき込んで、唇を弓の形に釣り上げる。

「そんな声も出せるんだな」

「え、何？ どんな声……………ああ……………っ！」

スカートから忍び込んだ手が、春花の内股をつうつと撫でる。

雪人と自分がこんなことをしているなんて信じられない。自分で誘っておいてなんだが、まさか現実になるとは思わなかったのだ。

涙ぐむ春花の太腿が、雪人の指先で何度も撫でられる。春花はストッキングをはくのが嫌いなため、スカートのときはいつもハイソックスでごまかしていた。だけどこの場合、それが裏目に出たようだ。素肌を晒すことの無防備さを実感させられる。

「や、やめて、恥ずかしい、やっぱり……………」

「ん？ 『奥さんにしてほしい』んじやなかったのか」

どうやら雪人はちゃんと話を聞いていたようだ。あまりの羞恥に唇を震わせる春花に、続けて言う。

「なぜ嫌がる？ 望み通りのことを全部してやると言っているのに」

「で、でも、でも、わたし……………」

心の準備が、できているつもりでいて、全くできていなかった。

まさか本当にこんなことをされるなんて思っていなかったのだ。

子ども扱いされて、断られて、一人家を出る準備をしながらメソメソするはずだったのに……………

「あの、ごめんなさい、恥ずかしいから今日はい……………っ、こ、今度、来週とかで」  
情けないことを訴える春花に、雪人が薄く笑ったまま告げた。

「まず一つ目、覚えておけ。ここまで来て止められる男なんていない」

春花の伸びきったセーターをぐいとまくり上げ、雪人が片眉を上げる。

「……………面白いものを着てるんだな。色気はないが、まあ、春花らしいか」

彼はしばらく考えていた様子だったが、ほどなくしてキャミソールとブラが一体化した下着を、勢いよく胸の上まで引っ張り上げた。

「きゃあっ！」

今度こそ春花は悲鳴を上げた。

むき出しの乳房が夜の空気に触れ、先端がきゅっと硬くしまったのがわかる。

雪人の視線を感じ、春花は必死で抵抗した。

「み、見ちゃだめっ！ ……やだあ……っ！」

混乱する春花の乳房の先端に、雪人の唇が落ちてきた。

「ああ……っ！」

軽い音を立ててそこを吸われ、思わずのけぞってしまふ。

「あ……だめ……いや……っ……」

必死で腕を突っ張って抵抗するが、雪人を押しつけるには力が足りなかった。乳嘴に刺激を感じるたびに身体が熱くなる。

「は……あ……っ」

雪人が膨らみから顔を離し、春花の唇に貪るようなキスを降らせた。

春花はされるがままに、そのキスを受け止める。

頭の芯がぼんやりして、何も考えられなくなってきた。雪人の片手がもう一度スカートの中に伸び、春花のショーツをゆっくりと引きずり下ろす。

今更ながら、春花は自分がこんなときにどう振る舞えばいいのか、全くわかっていな

いことに気づいた。

——わ、私も何かした方がいいの？ どうしよう、どうしよう……！

戸惑う春花の脚から下着が引き抜かれる。

——だ、抱きついて、いいのかな……？

春花はぎゅっと目をつぶり、思い切って雪人の背中に腕を回してみた。

硬くて広い背中への感触に、春花の身体の芯がぞくりと震える。初めて知る男性の身体のたくましさには、春花の胸が激しく高鳴った。

その瞬間だった。

「いやあっ！」

あり得ない感触に、春花の唇から悲鳴が漏れる。

雪人が茂みの奥の濡れた裂け目に触れたからだ。

「何？ だめ、だめえ……っ……」

こんなところに触られるなんて信じられなかった。だが、のし掛かられているうえ、巧みに動きを封じられていて、彼の行為に抗うことができない。

雪人の指先が、焦らすように何度も茂みの中を行き来する。触れられた粘膜が、春花の意思とは関係なく、幾度も小さく収縮した。

「あ……ああ……っ」

指での愛撫に、下腹の奥が強<sup>うす</sup>く疼<sup>うず</sup>く。思わず身体をくねらせた春花の耳に、雪人が囁<sup>ささや</sup>きかけた。

「可愛いな、こんなに濡<sup>ぬ</sup>らして」

笑いを含んだその声には、明らかな情欲がにじんでいる。低い声が耳朶<sup>しだ</sup>を震わせた瞬間、春花の蜜窟<sup>みつく</sup>の奥から、じわりとぬるい雫<sup>しずく</sup>がにじんだ。

開かれた脚の中心で、閉じ合わされた襞<sup>ひだ</sup>のあわいがひくりと震える。

その場所が、雪人の指先で触れられるたびに、意思ある花びらのようにピクピクと蠢<sup>うご</sup>いてしまう。

春花の身体の反応に満足したのか、雪人の指がつぶ、と音を立てて蕩<sup>たろ</sup>けた泉に沈んだ。

「……っ、ひっ」

信じられない行為に、春花は必死で声を殺して耐える。

雪人の指が、浅い部分をくるりとひと撫<sup>な</sup>でした。

その動きだけで、春花のその部分はきゅっ<sup>すほ</sup>と窄<sup>すぼ</sup>まって、彼の指先をくわえ込んでしまった。

「いい反応だ」

雪人はそう呟くと、さらなる深みに指を進めた。

突然開かれた花髪が、異物の侵入を拒むようにびくびくと蠕<sup>せいでう</sup>動する。

「だめ……ゆび……だめ……ああ……っ」

息を弾ませる春花の身体が、再びビクンと跳ね上がる。

雪人の指はぬるついた蜜を纏<sup>まと</sup>い、緩やかに春花の中を行き来した。

「ああ、雪人さん……っ、これ、だめ……え……」

気づけば、春花は雪人の背中に縋<sup>すが</sup>りついていた。

あらゆる格好で彼の指をきゅっ<sup>すほ</sup>とくわえ込み、腰を浮かせて息を乱している。

「抜いて、お願い、手が汚れ……ん……っ！」

春花は半泣きになって懇願<sup>こんがん</sup>した。

耳元で響く雪人の呼吸が、かすかに苦しげに曇る。

抵抗など許さないと言わんばかりに、雪人が春花の唇を再び塞ぐ。

もう、何も考えられなかった。秘部を指先で弄<sup>もよそ</sup>ばれ、舌先を舐<sup>ねふ</sup>られて、身体力がまるで入らない。

「ん……ふ……っ……う……」

春花の目尻から、涙が一筋伝い落ちた。

怖いのに気持ちがよくて、わけがわからない。身体中が溶けてぐにやぐにやになってしまったように感じる。

「う、んっ……」

キスされたまま、春花は指の快楽から逃れようと、懸命に腰を揺らした。だが、そんな抵抗は無駄だった。一度するりと抜けた指が二本に増えて、さらに春花の隘路あいろうをこじ開ける。

「んー……っ！」

雪人の指を呑み込んだ蜜窟が、意図せずぎゅうつと収縮した。

「……嫌か？」

ふと、唇を離れた雪人がそんなことを呟く。我に返った春花は、慌てて首を振った。嫌ではない。こんな行為は初めてで、どうやって受け止めていいのかわからないだけだ。だが、それをどう言葉にしているのかわからない。

「え、あ……嫌じゃ……ない……」

かすれた声でそれだけ答えた刹那せつな、中を満たしていた雪人の指が、ずるりと音を立てて抜かれた。

「あ……っ！」

その刺激だけで、春花の不慣れな身体がひくりと震える。

脚の間に陣取っていた雪人が、身体を起こした。

「……今日はやめよう。取り返しをつかないことをしそうだ」

雪人が苦しげにそう言い、ぬらりと濡れた指を一瞥いちべつしてため息をついた。

どうしたのだろう、と春花はぼんやり彼を見上げたが、すぐに我に返り、めくり上げられたキャミソールとセーターを直した。

「なんでやめるの？」

先ほどまで散々弄もよほばれていた身体が重くて仕方がない。

だが春花は気合いで起き上がり、雪人のシャツの袖を引っ張って尋ねた。

「私、変なことした？」

「いや、違う。俺がおかしいだけだ」

雪人が、春花の目を見ずに低い声で呟く。

「どうして？ 私は平気だから」

振り向いた雪人が、かすかに目を細めた。

「俺は、どうかしていたんだ。先生から預かった君に、俺は何を……」

雪人の額ひたいにうっすら汗が浮いている。あまり顔色もよくない。

「……どうしたんだろう？」

心配になりつつも、春花は雪人のシャツの袖を掴んだまま言った。

「今、お父さんは関係ないよ。私、雪人さんの本物の奥さんになりたいの。だから……っ！」

春花の指先から、雪人の腕が離れた。言いつのる春花の腰に、その腕が回る。

抱き寄せられた、と思った瞬間、耳元で雪人の疲れたような声がした。  
 「何度も言うが、これ以上したら本当に止められない。今の俺はどうかしている。保護者でいられそうにないんだ」

「いいの。それでいいんだよ。保護者になってほしいなんて、私は思っていない！」  
 雪人の胸に抱き込まれたまま、春花は力強く答える。ちよつと怖いけれど、本気で奥さんにしてほしいと思っているのだ。だから、何をされてもいいの。  
 しかし春花の答えに、雪人がおかしげに喉を鳴らした。

また子ども扱いされた。

そう思い唇をかむ春花に、雪人が少し落ち着きを取り戻した口調で言う。

「軽々しくそんなことを言わないでくれ。まだ社会に出たばかりのヒヨコのおくせに。君を抱くのは、何も知らない子どもにも無理強いするのと変わらない」

「そんなことない、無理強いされたとか、絶対に思わない……のに」  
 言っているうちに悲しくなってきた。

どうすれば子ども扱いをやめてくれるのだろう。雪人のことが本当に好きなのに。気持ちの伝え方がわからなくて、焦あせってしまふ。

「私、ちゃんと働いてるし、もう二十一だから子どもじゃない……」  
 情けなくてうつむいた瞬間、春花の腰に回った腕にぎゅっと力がこもった。

「……わかった。じゃあこうしよう。明日までゆっくり考えて、本気で続きをしてもいいと思うなら、明日の夜、俺の部屋において」  
 春花を抱きしめたまま、雪人がそう言った。

「わかった。明日また、この部屋に来る」

はつきりそう答えると、雪人が小さく喉を鳴らした。

「嫌なら無理しなくていい。……俺ももう、こんな真似はしない」

その言葉と同時に、腕の力が緩んだ。雪人は春花を残してベッドから立ち上がり、そのままパソコン机に向かう。

「……じゃあ、また明日」

そう言うと、雪人はノートパソコンを開き、仕事を始めてしまった。

これ以上相手にしてもらえないことを悟りつつ、春花は床に落ちた下着を拾って立ち上がる。

「私、明日の夜絶対に来るから」

だが、背を向けた彼の反応はない。

「ほんとに来るからね」

何も答えてくれない雪人の背中にそう言い切って、春花は彼の部屋を飛び出す。

……扉が閉まった直後に雪人がついた大きなため息が、春花の耳に届くことはな



かった。

## 第二章

亡くなった春花の父は、いつも口癖のように言っていた。

『春花、人生は思い出の積み重ねだよ。いいことも悪いことも全部思い出になる。その思い出が、春花の生きた軌跡きせきになるんだ』

どんなことが起きても、それが人生の彩りいろどになる日が来る。だから、一日一日を精一杯味わって生き続けることが大事。やりたいことがあれば、どんどん挑戦するといい。失敗も悔しさも、いつかは愛おしい人生の色になる……と。

父にそう言われて育てられたお陰か、春花は割と前向きに、何でも挑戦してみるタイプの女の子になった。

元から体力もあるし、メンタル面でもけっこうタフな自覚はある。

猪突猛進……と言われたら否定できないが、前向きさだけを頼りに、これまで突き進んできたとも言える。

同時に、思い込んだら突っ走りすぎて、何度後悔したことか……

——いくら何でも、今回の件は……恥ずかしすぎる……

昨夜の醜態しゅうたいを思い出し、春花は額を押さえた。

失敗の積み重ねが、本当に『愛おしい人生の彩りいろど』になる日が来るのだろうか。

父が嘘をつくわけはないと思うが、春花が昨夜やらかしたことは『ただの汚点』として残ってしまう気がしないでもない。

——何事も経験だからって、やっついいことと悪いことがある……よね……

羞恥しゅうじで頭をかきむしりたくなりながら、春花は目の前のキーボードに文字を打ち込んだ。

昨夜の自分はどうかしていた。

あんなふうに雪人の部屋に入り込んで、抱いてほしいと遠回しに縋すがって、それから……

——は、恥ちずかしい！

なぜあんななりふり構わない行動に走ってしまったのだろうか。

もつと穏やかに説得すればよかったのだ。好きだから一緒に暮らしてほしい、と。何をあんなに焦あせっていたのだろうか。

いや、あのときは『もうだめだ、あとがない』と真剣まけんに思っていたのだ。

身体からだを弄もてあそばれたことを思い出す。

——あ、あんなコト、されるなんて。どうしよう。雪人さんの顔を見られない。

何をされ、どこを見られたのか。思い出すだけで変な汗が出てくる。君が誘ったくせに、と言われたが、その通りだ。

自分から誘っておいて、いざとなったら子どものように怯え、動転しているのだ。春花はキーを叩く手を止め、頭を抱えた。

仕事が終わったら、どんな顔をして家に帰ればいいのかだろう。

今朝春花は、雪人の朝ご飯を作り置きして、彼の顔を見ずに朝五時に家を飛び出した。家に帰って、雪人とどんなふうにお話をすればいいのかわからない。

悶々としていたとき、春花の肩が、ポンと叩かれた。

驚きのあまり椅子の上でちよっと飛び上がってしまう。

「さつきから声かけてるんだけど大丈夫？」

先輩の青山だった。爽やかな顔を曇らせた彼が、心配そうに首をかしげる。春花は慌てて愛想笑いを浮かべた。

「な、何でもありません！ 大丈夫です！」

「顔が赤いけど」

そう指摘され、春花は慌ててノートでパタパタと自分の顔を煽いだ。

——し、仕事に集中、仕事に集中……っ！

必死で頭の熱を冷ましている春花に、青山が、腕組みをして言う。

## 立ち読みサンプル はここまで

「この前納品したシステムあるでしょう。あれに変なログがでてるんだけど見てくれますか？」

変なログ、という言葉に、春花の煮え立った頭がすっと冷める。ログというのは、プログラムの動作を履歴として残したファイルのことだ。そこに変なデータが記載されているということは、プログラムのどこかに問題があるのかもしれないことを意味する。

「おとといリリースした会計システムですよ？ はい、確認します」

「うん。詳細はメールで送る。俺の方も調べてみるから、渡辺さんも対応をお願いします。今やっている作業は来週でいいから、午前中にわかったことだけメールで頂戴」

「わかりました、すぐ調べます！」

そう答えて、春花はプログラムの開発用ソフトを立ち上げ、納品したばかりのファイルを開く。

そして、本番環境にアクセスし、青山が『おかしい』と言っていたログファイルデータをダウンロードした。

しばらくファイルを眺め、青山からのメールや、システムから算出されたデータを見比べているうち、春花もおかしなことに気づく。

——あれ？ これ……基礎パラメータがズレてないかな？ 先月の値で計算してるのかも。